

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.106
2012.7.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 - 塚本師也

第2回 阿玉台式土器とは(2)

前回は、阿玉台式土器の標本的な深鉢形土器を取り上げ、施文域の分割、各施文域に配置される文様、文様描出技法などの基本的な特徴を指摘した。しかし、実際には基本的な特徴のすべてを持たない土器も多い。そこで今回は、「阿玉台式の範囲はどこまでか。」という問題を扱う。

図示した阿玉台式の深鉢形土器は、口辺部区画文、素文の頸部、体部垂下隆帯文のすべてを完備していない。口辺部区画文を省略した土器(第2図1)、更に垂下隆帯文が口辺部までせり上がった土器(第2図2)、素文の頸部を省略し、隆帯が口辺部区画文から直接垂下した土器(第2図3)、口辺部の区画文以外を省略した土器(第2図4)、三つの施文域すべてに文様を配さず、全面無文か地文のみの土器(第2図5)、全面無文か地文のみで、口辺に突起が付く土器(第2図7・8)などがある。「V」字状の突起は、全時期を通じ

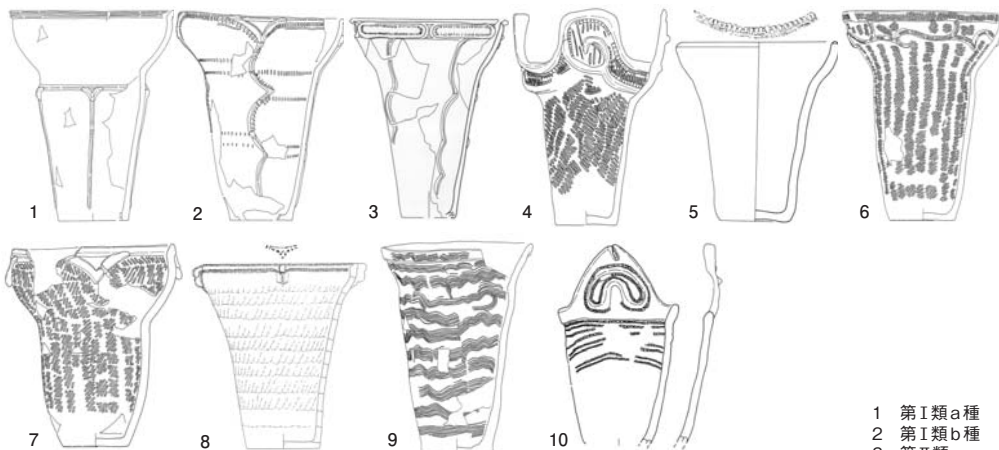
て存在する(第2図7)。「魚鱗状」の突起あるいは「粘土棒を芯としてこれを粘土帯で囲った突起(第2図8)」は前半期(阿玉台Ia~II式期)に特有のものである。阿玉台式土器は、基本となる三帯構成の土器と、各施文域に配すべき文様のうちのいくつか、あるいはすべてを省略した土器とで構成される。

この他に大きな把手を正面に付ける土器(第2図10)や口辺部に横「S」字状の隆帯を貼り付ける土器(第2図6)もある。前者は勝坂式、後者は大木7b式の系譜を引く。櫛歯状工具による横位の波状条線を密接施文した土器(第2図9)も稀にみられる。これらは、他の阿玉台式と共存するだけでなく、文様描出技法や後述する特徴により「阿玉台式」と認識することができる。

阿玉台式土器はこのように多様性に

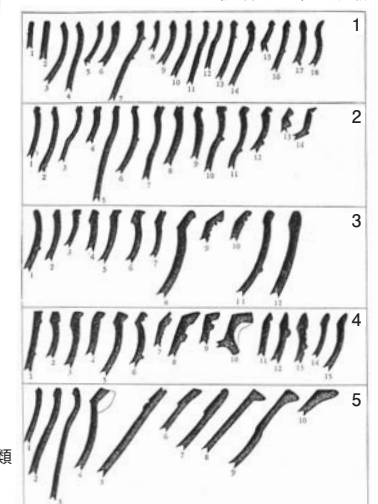
富むが、関東地方で中期縄文土器に慣れ親しんだ人は、比較的容易に、他の土器から区別することができる。その際の基準は何か。他の土器には見られない、阿玉台式全体に共通する特徴とは何か。西村正衛は阿玉台式土器の報告に際し、類(細別型式)ごとに、「口辺部断面図」(第3図)を一括して掲載した(西村1972等)。これを見ると、ほとんどの土器の口辺部内面に稜があり、阿玉台Ia式から阿玉台IV式まで形を変えながら継続している。「稜」を含む口辺部断面形は、阿玉台式を規定する一つの重要な要素と言えよう。内面の稜は、加曽利E式にはほとんど継承されない。並行する勝坂式前半期や大木7b式に見られ、中期前葉の土器の特徴ともいえるが、これらの土器の中で、内面に稜を有する土器の割合は、阿玉台式土器ほどは高くはない。

第2図



- 1・2・6・7 茨城県宮後遺跡/吹野富美夫、1999、『宮後遺跡1』(財)茨城県教育財団
- 吹野富美夫、2005、『宮後遺跡2』(財)茨城県教育財団
- 3・5 茨城県大境遺跡/川井正一、1981、『大境遺跡』(財)茨城県教育財団
- 8 東京都藤の台遺跡/川口正幸、1980、『藤の台遺跡III』藤の台遺跡調査会
- 9 茨城県裏山遺跡/黒沢秀雄、1992、『裏山遺跡』(財)茨城県教育財団
- 10 茨城県中台遺跡/新井聡、1995、『中台遺跡』(財)茨城県教育財団

第3図 阿玉台式口辺部の断面図
(西村1972)より転載



- 1 第I類a種
- 2 第I類b種
- 3 第II類
- 4 第III類及びIV類
- 5 無文土器(5~10浅鉢)

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■阿玉台式土器	阿玉台式土器とは(2)	塚本師也 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第99回)	新里亮人…3
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第4回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	『亀の碑と正統』	西野 保…4

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第4回)

渡辺 誠

5. 『貝塚』・『土偶』と『日本貝塚の研究』

弟子入りをした以上は、背中を流すのも仕事と思えと、母には厳しく諭された。そして勉強しながらのお手伝いには、二つあった。第一は、先生の学会発表などの資料作りで、ガリ版の原紙きりであった。高校時代にこのことの上手な藤岡君という友達がいる、教えてもらっていた。しかしそれでは素人丸出しであり、一ヶ月お茶の水の中央謄写学院へ通ったりもした。これが思いがけずいいアルバイトにもなった。大学の組合から大量の仕事が回ってきた時には結構いい収入となり、遺跡歩きが楽になった。しかしその後タイプ印刷が登場し、このことは廃業となった。

資料作りで忘れられないのは、先生が考古学会の例会で縄文時代の骨角製漁具の講演をすることになり、関連文献リストの原紙きりであった。実に丹念に年代順に整理されていて、いまだにこれを超えるものは無い。いい勉強になったし、これが内輪の弟子の特権かと思ったほどであり、後にもこうしたお手伝いは続き、その内容をしっかり身につけることができた。

もう一つのお手伝いは、土器洗いなどの資料整理や、拓本・実測図の作成である。先生は写真とともに拓本も上手で、裏打ちのことまで懇切に指導して下さった。そのため裏打ちをすることはごく当たり前のことと思っていたが、後日裏打ちも知らないで図版作りをしている大先生をみて、びっくりしたことがあった。

勉強を兼ねた手伝いばかりでなく、単なる使い走りも母の教えのとおりにした。

タイトルに掲げた出版物のうち、前者は雑誌であり、後二者は単行本である。

『貝塚』誌はB5版4頁であり、平井尚志氏が編集刊行されていた。当時の平井氏は万常紙店の総務部長であった。銀座3丁目の会社へ江坂先生の使いで原稿をお届けに伺ったが、近くの喫茶店ブラジルで美味しいコーヒーとともに、いろいろなお話を伺うことができた。田舎の高校生から東京の大学生になったばかりの私には、風格のある銀座の喫茶店に連れられて行くことには、ちょっと楽しいものがあった。

原稿でも特に重要だったのは、後2頁の考古だより(発掘・学会・人の動き)と、新刊抄報であった。私への激励のためか、磐城高校の渡辺誠君が慶応大学へ進学したと載せて下さった時は、うれしかった。

これらの欄は、後に『考古学ジャーナル』に引き継がれることになり、慶応の経済出身の佐久間 信氏が江坂先生に相談にこられたことが記憶に残っている。また私の資料紹介も、3度掲載して頂いた。江坂先生は書き慣れることが大事と、『貝塚』誌はじめいろいろな雑誌に掲載の依頼をして下さった。もちろんこのなかには図もあり、インレタやスクリーントーンの無かった時代であり、それなりの苦労があったものであるが、これで身に付いたことは今でも役立っている。

平井氏は研究者である以上に、実業界に身を置く方であった。

約10年後、私は京都の平安博物館に努めることになったが、平井氏もほぼ同じ頃に万常紙店大阪支店長に着任され、就職祝いをして下さい。その時に、君には父親がいないから言ってくれる人がいないので、私が代わりに言ってあげると言われ、社会人として絶対に守るべきこと3点に絞って教えて下さった。1は金銭上のミスをしないこと、2は女性問題を起こさないこと、そして3として上司の悪口を絶対に言わないことであった。後に転職した場合でも、不審をもたれれば必ず前の職場へ問い合わせがいくことになるとも、付け加えられた。これらのことはきちんと守ってきたし、ありがたい父親代わりの御指南であった。

その後平井氏は、名古屋にある万常紙店本社の会長になられたが、偶然私も名古屋大学に奉職することになり、御縁のつながりを大変喜んで頂いた。そして名古屋で飲んでいた時にも、さらに教えて下さったことがあった。今でこそ豊かになっていろいろな雑誌が登場したため、厚くない『貝塚』誌は軽視されるようになったが、しかし以前はそれに掲載されることは、例えば日本考古学協会会員推薦に伴う業績としても認められたため、しばしば頭を下げられ載せたことがあった。しかしそのことを忘れ、感謝されないこともあるが、君にはそんな学者にはなってほしくないからね、と言われたのである。

次に江坂先生の名著ともいべき『土偶』のお手伝いでは、実測ばかりでなく、『人類学雑誌』などに掲載されていた図を写すことであったが、今日のようにゼロックスがあるわけではなく、本を汚さないように気をつけながら、筆で書かれた図をすべてペンでなぞらえたのである。また地方から土偶の出土状態を使せんに略図で知らせてきたものを、トレースしたこともあった。そのお陰で、自分自身では土偶の研究をしたわけではなかったが、全国的な様子を知ることができ、大幸運であったといえよう。

『日本貝塚の研究』でも、トレースのアルバイトをさせて頂いた。これには膨大な資料が含まれていて、貝塚研究の基礎的な資料として、今でも時々読み直して勉強している。すでにその仕事は先輩の笹津備洋・近森正氏が担当しておられた。笹塚氏が原稿の清書、近森氏が筆書きの図のトレースを分担しており、私はその補助みたいなものであった。

著者である清野謙次氏は、多くの貝塚の発掘で得た人骨による日本石器時代人骨の研究で、原日本人説という金字塔を打ち立てたが、関連する人工遺物は未報告のままであった。しかし無視する気はまったくなく、考古学者にとりまとめを依頼するつもりであった。そして西日本は江坂輝弥・東日本は芹沢長介先生の担当で岩波書店から刊行されることになった。ただ遺物

略歴	
昭和13年11月18日	福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月	福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月	慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教授
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月	日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

は筆書きのため、ペンでトレースすることになったのである。

その原本は俗に大福帳とよばれ、タテ30、ヨコ50程度で、厚さ1.5cmの和紙のノートである。そして表紙裏には袋が作られていて、後日に備えた写真と拓本とが収納されていた。いかに周到な用意をされていたかがよく分かる。これらは慶応の研究室に約10冊収納されているが、若干失われたものもある。これは1969年に予定どおり岩波書店から刊行されたが、当時の編集長である田村義也氏の御配慮で、校正はすべて私に任されることになった。お陰で否応なしに、全体をよく理解することができた。

しかし名古屋に来てみると驚いたことに、昔の先生は人骨あさりで、遺物は目茶苦茶だという人が大変多い。大福帳は見

ることがなくても、『日本貝塚の研究』は公刊されているのであり、批判は当たらない。むしろ人骨は人任せ、おまけに自然遺物も人任せで、土器ばかり追いかけている現状には、どれほどの進歩あったといえるのであろうか。生活の復元に重要な資料を人任せでは、遺跡の破壊と同じで、先人を批判することは間違いである。貝層で土器の編年をするだけで、そもそもそれを形成した縄文人の住居跡や村落跡の調査がほとんどなされていないことをみても、研究上のゆがみが明らかである。

東海地方の先生ではないが、貝層は雑物?が多いだけ厚くなっていて、分層して土器の編年がし易いから発掘するのだ、と言った著名な先生もいた。学生時代に聞いたことで、半面教師もまた役立つことがある。

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

レエッセイ

マイ・フェイス・サイト 99

面縄遺跡群 ～ 鹿児島県伊仙町

新里 亮人

面縄遺跡群は、奄美大島に南隣する徳之島の伊仙町面縄に所在する縄文時代前期から中世併行期の遺跡である。遺跡は面縄集落の海岸に面する標高10メートル前後の砂丘上、目の前に珊瑚礁が広がる環境に位置する。そのため発掘調査では必ずと言ってよいほど珊瑚礁域に生息する貝類や魚類が豊富に出土する。

本遺跡は、南島考古学を志すものにとって欠かすことのできない遺跡である。ここから発見された土器は、面縄前庭式(縄文時代中期並行期)、面縄東洞式、面縄西洞式(縄文時代後期並行)と命名され、琉球列島における土器編年の上で不可欠な資料だからだ。

面縄遺跡群は、昭和5年、地元の研究者である広瀬祐良に発見され、山崎五十磨の報告によってその調査成果を知ることができる。その後、小原一夫、三宅宗悦、中山英司、大山柏、河口貞徳、国分直一など名だたる考古学者、人類学者らによる幾度も調査が行なわれてきた。これらの発掘により、本遺跡は4つの貝塚から成る遺跡だと認識されてきたが、伊仙町教育委員会が主体となった1980年代の確認調査によって墓地や住居跡が新たに発見されたことから、それ以来面縄遺跡群と呼ばれるようになった。

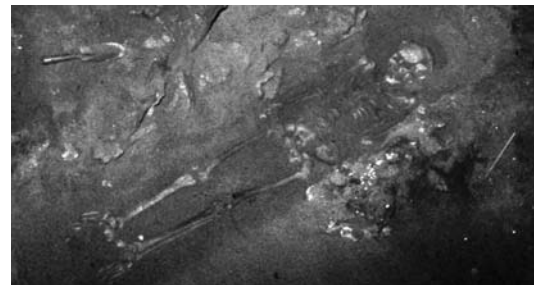
第1貝塚は、面縄小学校西方の石灰岩崖下および洞穴内にあり、縄文時代前期並行期から兼久式期(古代並行期)の遺構、遺物が発見されている。特に崖下部や洞穴内の調査では供献土器や貝製品に伴って人骨が発見されていることから、縄文、弥生時代並行期には墓地空間が広がっていたと想定されている。

第2貝塚は、面縄小学校の学校敷地及びその周辺に位置する。これまでの調査で嘉徳式期(縄文時代後期並行期)の集石、住居跡、ピットが発見されており、これらの遺構に伴って多くの土器、貝製品、骨製品、自然遺物が得られている。

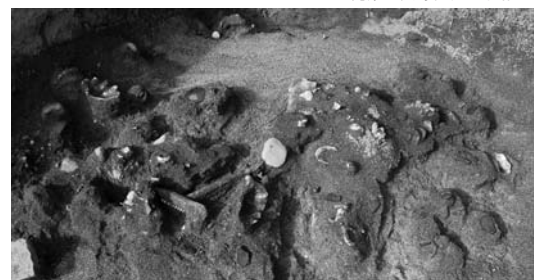
第3貝塚は面縄海岸の北側400mにある岩陰部で発見された遺跡で、古代並行期の貝層と縄文時代中期並行期の遺物が出土している。発見当初は兼久貝塚と名付けられており、古代並行期の奄美諸島を代表する兼久式土器の標識遺跡となっている。

第4貝塚は、面縄小学校北側にある石灰岩の岩陰内とその全面に広がる畑地内に位置する。岩陰は西洞穴、東洞穴の2つがあり、それらの全面(前提部)の発掘調査によって複数の遺物包含層が発見されている。本遺跡の層位的発掘によって得られた土器が、先述した面縄前提式、面縄東洞式、面縄西洞式である。

伊仙町教育委員会は、面縄遺跡群の範囲と内容を把握するため2007年より追加調査を進めている。5か年にわたる調査の結果、面縄海岸を取り巻く石灰岩丘陵の下部に広がる砂



面縄第一貝塚発見の石棺墓



面縄第二貝塚の調査状況

面縄貝塚発掘調査履歴

調査者	年代	第1貝塚	第2貝塚	第3貝塚	第4貝塚	調査の概要
山崎五十磨	1930年	○				貝層の確認(6,7世紀頃)
小原一夫	1932年	○	○			第2貝塚の発見(縄文時代後期)
大山柏, 小原一夫	1933年		○			出土土器を縄文系統に比定
三宅宗悦, 藤岡謙二郎	1940年		○			第2貝塚の層位的な発掘
河口貞徳	1954年			○		第3貝塚の発見と調査
三国友五郎, 国分直一			○		○	第4貝塚の発見と試掘
河口貞徳, 国分直一, 野口義磨, 原口正三	1958年		○		○	第4貝塚の発掘調査

丘一帯よりいくつもの遺構や包含層が検出された。これによって遺跡の範囲は大きく拡大することとなり、面縄遺跡群は4つの貝塚から構成されているだけでなく、珊瑚礁環境広がる面縄海岸一帯を長期的に利用した人間の活動証拠を留める貴重な遺跡であることが明らかとなってきた。

面縄遺跡群にはあらゆる時代の遺構や遺物が含まれているので、この遺跡は南島先史時代人の居住、墓制、食生活など当時のライフスタイルを今に伝える島の貴重なタイムカプセルだと言える。伊仙町教育委員会は過去の調査成果を総括する報告書の刊行を目指し、現在遺物の整理作業を進めている。
※次回のマイ・フェイバレット・サイトは野崎拓司さんです。

考古学者の書棚

「亀の碑と正統 領域国家の正統主張と複数の東アジア冊封体制観」

平勢隆朗／白帝社(2004)

西野 保

江戸時代の徳川御三家のひとつ水戸徳川家は、徳川家康公の第11子の頼房公を藩祖とし、その2代藩主は昨年までテレビの時代劇シリーズ「水戸黄門」として有名な徳川光圀公である。徳川御三家の一つとして、徳川を称して三つ葉葵の紋を用いることを許された水戸徳川家は、同じ御三家の尾張・紀州家と違って、参勤交代がない江戸定府で常に将軍のそばにいたことから、副将軍とも称されていたという。

その水戸徳川家歴代の墓所は、通称瑞龍山と呼ばれ、水戸城から北に約22km離れた、現在の茨城県常陸太田市瑞龍町にある。面積154,954.21㎡という広大な山中に、初代藩主頼房公から現在まで使用されている墓所で、歴代の藩主(当主)・夫人、一族など119基の墓が営まれている。その墓制は儒礼に基づいて2代藩主光圀公が定めた水戸徳川家独自の様式で、他の近世大名家墓所に同様の様式を認めることはできていない。その形は亀趺と呼ばれる亀の胴体に獣の頭がつく台石の上に竿石が乗り、その背後に封(ほう)と呼ばれる土饅頭が築かれ、その下に亡骸が埋葬されている。この墓制は「螭首亀趺(ちしゅきふ)」と呼ばれ、水戸徳川家墓所の代名詞ともなっている。

平成14年、この墓所を指定史跡にという動きが起こり、筆者がその調査を担当することとなった。今までに近世大名家墓所の調査の経験はなく、独自の埋葬様式を持つ墓所の調査ということで、異分野の先生方からご協力をいただきながら調査を進めていく中で出会ったのが本書である。

本書は、水戸徳川家墓所をはじめとした、亀趺を持つ碑について概観している。それは日本国内にとどまらず、発祥の地である中国、そして朝鮮半島も含め、研究史とともに亀趺を総括している。初めに、亀趺の発祥の地である中国での様相、次に中国から伝播した朝鮮半島での様相、そして、日本での様相と3章に分けられ、巻末には日本の江戸時代亀趺碑および資料一覧、中国および朝鮮王朝亀趺碑資料状況がそれぞれまとめられている。

亀趺は中国の後漢時代を発祥とし、一度消滅したが南北朝時代に復活し、その後統一新羅の時代に朝鮮半島にも伝わっている。中国では亀趺を用いることができる階級(品階)が定められ、南北朝時代の王墓や後の明代の皇帝墓に亀趺が用いられていた。朝鮮半島に伝わった亀趺は、新羅の時代は唐の影響を受けていたが、高麗の時代になると高僧の墓にも亀趺碑が用いられるようになった。その一方、当時の日本には墓に用いるものとして伝わることはなく、寺院の舍利塔に用いられることとして伝わった。日本において亀趺が墓に用いられるよ

うになったのは江戸時代になってからで、大名が自分の領地に設ける墓所に用いるようになった。儒礼に基づく葬送をとり入れた水戸徳川家と神葬の会津藩主松平家は広大な山中に亀趺のある墓を営み、その背後には墳丘(水戸徳川家は封)を設けている。また、萩藩主毛利家では昭穆制によって分けられた奇数代の寺院に亀趺のある墓が造られている。その他にも、光圀公が楠正成公を顕彰して湊川神社(神戸市)に建てた「嗚呼忠臣楠子之墓」にも亀趺が用いられていることを本書では紹介している。

亀趺を持つ墓所の事例について、何の知識もないなかで水戸徳川家墓所の調査に着手しなければならなかった筆者に、本書は多くの情報を与えてくれた。その一方で日本における亀趺は様々な様相をもっており、亀趺を持つ墓所をひとくりにして比較することができない、それぞれが独自性を持ち合わせていることも感じた。

さて、水戸徳川家において光圀公はなぜこのような墓制を採用したのか。光圀公の正室であった泰姫(哀文夫人)の葬儀に際し、当時一般的であった仏葬ではなく、朱子の『家礼』に基づく儒葬で行ったことが水戸徳川家の儒葬の始まりである。光圀公が夫人の実家である近衛家に宛てた文書の中で、日本古来の埋葬方法である古墳が儒礼による埋葬方法に最も近いとしている。大化2年(646)に大化の薄葬令が出され、古墳造営が行われなくなり、地上の目印がなくなってしまった。中世には宝篋印塔や五輪塔などが造られているものの、大規模な墓所の造営が再び本格的に行われるようになったのは江戸時代に入って幕藩体制が確立し、各大名が分け与えられた領地に大規模な墓所の造営を始めたことである。この近世大名家墓所の造営を著者である平勢先生は「いわば古墳時代の復活である。」と述べている。この視点に衝撃を受け、まさに「歴史は繰り返す」という言葉を痛感した。

なお、水戸徳川家墓所は、東日本大震災で石垣の崩落や墓碑の倒壊など大きな被害を受け、現在災害復旧事業に取り組んでいるため、一般公開は行われていない。

アルカ通信 No.106

発行日 2012年7月1日
 発行人 角張淳一
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp